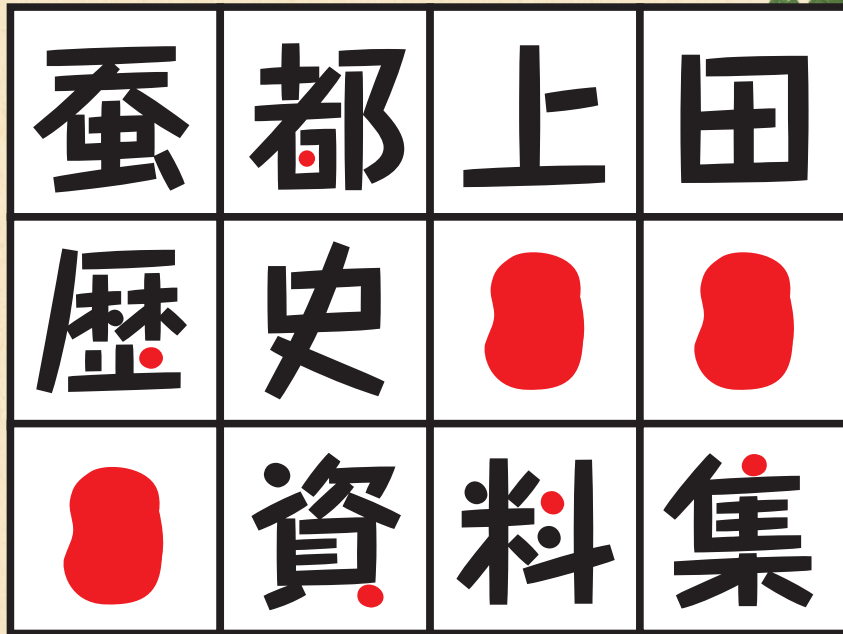


博物館と市民の協働による資料集



上田市立博物館企画展『蚕都上田と横浜開港』

2009年10月3日～11月15日開催

本資料集は、同展の展示品をもとに蚕都上田プロジェクトが制作・解説した展示パネルの図版を収録したものです。

蚕都上田プロジェクト

もくじ



蚕種製造

養蚕教弘録

2



清水金左衛門

乾湿計

4



蚕種製造

蚕かひの学、種紙年代鑑

5



〃

新撰養蚕秘書

6



和紙製造

道具見本

8



生糸製造

依田社

9



〃

下村亀三郎の記録

10



生糸商人

吉池文之助の記録

11



幕末外国貿易

問屋の記録、藩の記録

12



生糸製造

資料写真

13



〃

商標

14



蚕糸業

大日本蚕業歴史画

16



案内

諸国道中商人鑑

18



幕末史

ペリー来船図

20

## はじめに

く歴史資料から見えてくる蚕都上田く

上田小県は、古くは江戸時代から明治・大正・昭和にかけて蚕糸業で繁栄し、大正九年（一九一九年）に市制を施行した上田市とその後背地域である小県郡が、「蚕都上田」と呼ばれるにふさわしい繁栄の時代を築きました。

蚕都上田プロジェクトでは、蚕糸業で栄えた上田小県を顕彰し、この地域を育んだ蚕糸業、蚕都の経済力によってもたらされた建造物・近代化産業遺産などの文化財、上田紬に代表される絹の文化、それらの背景にある歴史を上田のまちづくり・人づくりに活かす市民参加型の活動を行っています。

平成二十一年度には、長野県地域発元気づくり支援金の助成を受けて地域活性化事業「蚕都上田お宝発見二〇〇九」を実施しました。この事業では、蚕都上田のまちづくり・人づくりを始動させるため、蚕都上田展（藤本蚕業歴史館の開設記念展示、上田つるし飾り「甦る布展」など）、上田市立博物館企画展「蚕都上田と横浜開港」との連携による蚕都上田展巡回ツアー、二回に渡るシンポジウムの開催（「蚕都上田お宝発見く歴史と文化く」「蚕都上田のまちづくり・人づくり」）、四回にわたるまちあるき（西塩田・別所編、飯沼・丸子編、塩尻編、市街地編）、近代化産業遺産めぐりく群馬編く、キッズプログラム、蚕都上田マップ作成などを行いました。

この冊子は、上田市立博物館で開催された「蚕都上田と横浜開港」展に展示した資料を中心に、その展示パネル制作を行い、そ

れらを抄録したものです。

上田小県の蚕糸業は江戸時代に盛んになり、江戸時代後期には、蚕糸業とりわけ蚕種製造業においては、日本一の地位を占めるようになりました。優れた蚕種製造家も輩出し、藤本善右衛門保右は『蚕かひの学』（天保十二年、一八四一年）を、清水金左衛門が『養蚕教弘録』（弘化四年、一八四七年）を著し、上田の蚕種を全国に広めるのにも大きく貢献しました。さらに、横浜港が安政六年（一八五九年）に開港すると、上田の蚕種や糸が欧米に輸出されるようになり、蚕都上田の歴史が織りなされていきました。

私たちは、ある意味、歴史の彼方に埋もれている古い資料をデジタル化し、パネル展示したり、インターネットで閲覧できるデジタルアーカイブサイトにするることによって、歴史の再発見、蚕都上田の文化の発見が促されるようにデジタルアーカイブ化の取り組みも実践しています。

これらの資料集が「蚕都上田」を知る手がかりとなり、蚕都上田のまちづくり・人づくりのお役に立てていただくことを願っています。

平成二十二年 三月三十一日

蚕都上田プロジェクト事務局長 前川道博

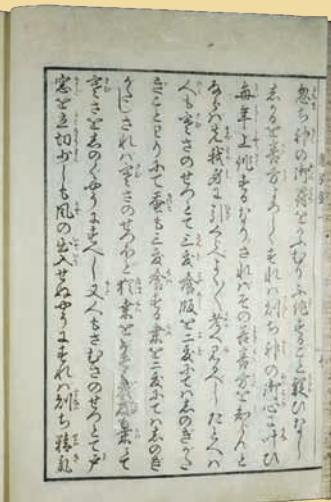
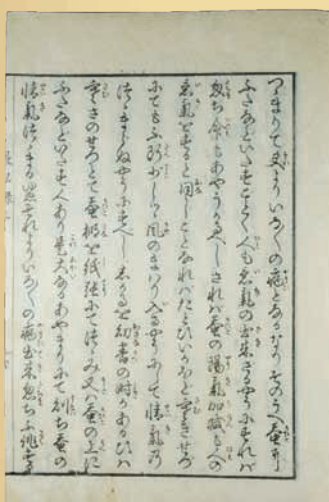
# 養蚕教弘録

・養蚕教弘録  
 (二巻、一八四七(弘化四)年、  
 上田市立博物館蔵)

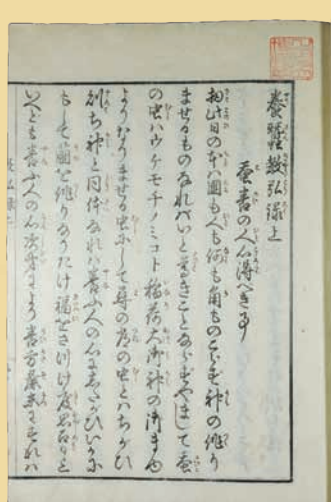
上塩尻村の清水金左衛門(一八三  
 〇(八八)が著した養蚕技術書。

蚕を一箇所で大量に飼育するのでは  
 なく、ある程度少量で餌の桑の葉が十  
 分に行き渡る「薄飼」という飼育法を  
 金左衛門は奨励している。

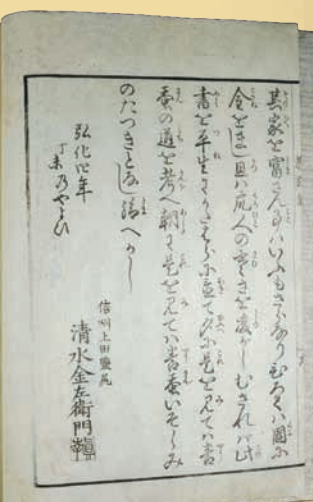
表紙



本文②



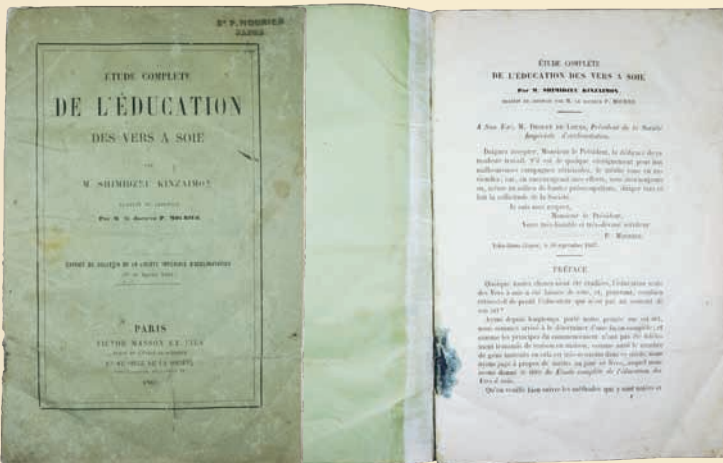
本文①



## 養蚕教弘録の仏訳本

養蚕教弘録の仏訳本  
 (1868 (明治元)年、清水久之助氏蔵)

清水金左衛門の養蚕教弘録はフランス語に訳され、1868 (明治元)年パリの専門誌『帝国順応学会誌』に掲載された。日本とフランスの養蚕技術が比較されている。



養蚕教弘録上 蚕養の人心得べき事

扱此日の本八国も人も何も角ものこ  
らず神の作りませるものなればいと  
尊きことならずや。まして蚕の虫ハ  
ウケモチノミコト稲荷大御神の御ま  
ゆよりなりませる虫にして尋の常の  
虫とハらがひ則ら神と同体なれば、  
養ふ人の心にしたがひいかにもして  
繭を作り、なりたけ福をさづけ度思  
召る、といへども、養ふ人の心次第  
により養方粗末にすれば忽ち神の御  
罰をかむり不作すること疑ひなし。  
しかるを養方よろしくすれば則ち神  
の御心に叶ひ毎年上作するなり。さ  
ればその善養方を知らんとならば先  
我身に引くらべよく、考へ見るべ  
し。たとへば人も寒さのせつとて三  
度喰飯を二度にてハしのぎがたきこ  
とわりにて、蚕も三度喰する桑を二  
度にてハしのぎがたし。されば寒さ  
のせつほど猶桑をうすく幾度も桑に  
て寒さをしのぐやうにすべし。又人  
もさむさのせつとて戸窓を立切少し  
も風の出入せぬやうにすれば則ち精  
気つ、まりて夫よりいろ、の病と  
なるなり。そのうへ蚕にふたなどい  
たすごとく人も急気の出来ざるやう  
にすれば忽ち命もあやうかるべし。  
されば蚕の陽気加減も人の急気をす  
ると同じことなれば、たとひいかほ  
ど寒きせつにても不断少しづ、風の

まハリ入るやうにして、精気をつ、  
まらぬやうにすべし。しかるを幼養  
の時があるひハ寒さのせつとて蚕棚  
を紙帳にてつ、み又ハ蚕の上によた  
などいたす人あり。是大なるあやま  
りにて、則ち蚕の精気つ、まるゆゑ  
それよりいろ、の病出来忽ち不作  
するなり。されば蚕の陽気加減ハ只  
あた、かにしてむさがるやうにすべ  
し。氣の籠りむすハ第一の毒なり。  
よく、心付べし。さて桑ハ何のた  
めに作るや。蚕のために作る。又諸  
道具ハ何のためにこしらふるや。則  
ち蚕のためにこしらふるなり。その  
蚕のためにこしらへたる諸道具と  
おし、厚養にして桑をおし、み桑ぶ  
そくにして手間ひまをおし、み養方粗  
末にする人あり。是大いなるあやま  
りにて不作すること疑ひなし。され  
ば手間ひ間をおし、まず諸道具とおし  
まずして蚕ハはじめほど薄養にすべ  
し。又桑をおし、まず成丈幾度もあた  
へ少しも手抜油断なきやうに養ふべ  
し。たとへば人も氏より育といへる  
たとひのごとく、只蚕のあたりはづ  
れハ養方次第にありと知るべし。さ  
れどもその養方にあることを知らず  
只蚕ハ人の運などといひなし、養方  
粗末にして後の不作を知らざる人ハ  
馬鹿の上なる大馬鹿ものなり(ツツ  
ナキトヤイハンヲロカトヤイフベ  
シ)。

現代語訳

さて、この「日の本」は国も人も何  
かもすべて神がお作りになったものな  
で大変尊いものである。ましてや蚕の幼  
虫は「ウケモチノミコト」稲荷大御神の  
肩からお生まれになった虫なので、他の  
虫とは違い、いわば神と一体なので、飼  
う人の心に従い、何とかして繭を作り、  
できるだけ幸福を授けたいとお考えであ  
ると言っても、飼う人の心次第で飼ひ方  
を粗末にすれば、たちまち神の罰を被り、  
不作になることは疑いのないことだ。だ  
から、飼ひ方を良くすれば、神の御心に  
叶ひ毎年沢山良い繭が取れるのである。  
だからその良い飼ひ方を知らないという  
ならば、まず自分のことだと思つてよく  
考えてみるとよい。例えば、人も寒い季  
節に三度食べる食事を二度にすれば、寒  
さが凄まじくなるのは当たり前で、蚕も三  
度食べる桑を二度にすれば寒さは凄まじ  
いのである。だから寒いときほどより桑  
を薄く何度も与えて、桑で寒さを凌ぐよ  
うにするべきである。また人も寒いから  
といって戸窓を閉め切り、少しも風が出  
入りにしないようにすれば、「精気」が滞  
り、それが原因で様々な病気にかかるの  
である。そこへ蚕に蓋などをするように、  
人も息が出来ないようにすれば忽ち命も  
危なくなる。それならば蚕の「陽気」の  
加減も人の息をするのと同じことなので、  
たとえこれほど寒い季節でも、常に少し  
ずつ風が回るようにして、「精気」が滞ら  
ないようにすべきである。そうであるの  
に、まだ小さい幼虫を育てている時やあ  
るいは寒い季節に、蚕棚を紙帳で包んだ

り、または蚕の上に蓋などをする人がい  
る。これは大きな間違いで、これでは蚕  
の「精気」が滞るため、これが原因で様々  
な病気が発生し忽ち不作となる。そうい  
うことなので蚕の「陽気」の加減はまず  
は暖かくして、決して蒸さないようにす  
るべきである。気が籠もり蒸した状態は、  
第一の毒であり、気をつけなければなら  
ないことである。さて、桑は何のために  
作るのか。それは蚕のためである。また  
諸道具は何のためにこしらえるのか。蚕  
のためにこしらえるのである。その蚕の  
ためにこしらえなければならぬ諸道具  
を惜しみ、「厚養(あつかい)」にして桑  
を惜しみ、桑不足にして手間ひまを惜し  
んで、飼ひ方を粗末にする人がいる。こ  
れは大きな間違いで不作になること間違  
いない。そういうわけで手間ひまを惜し  
まず、諸々の道具を惜しまず、蚕ははじ  
めほど「薄養」で飼わなければならぬ。  
また桑を惜しまずなるべく何度も与え、  
少しも手を抜かず、油断しないように飼  
わなければならぬ。たとえ人も「氏  
より育ち(家柄や身分よりも育つた環境  
やしつけのほう)が人間の形成に強い影響  
を与える」といふこと( )といつたたとえに  
もあるように、蚕の当たり外れも飼ひ方  
次第にあると知るべきである。けれど、  
適切な飼ひ方があることを知らずに、た  
だ蚕は人の運などと言い、粗末な飼ひ方  
をして、それが後々不作になることを知  
らない人は馬鹿よりさらに上の大馬鹿者  
である(それは飼ひ方が拙いといふので  
はない、愚かといふのである)。



# 乾湿計

養蚕乾湿計

(明治時代前期、清水久之助氏蔵)

清水金左衛門が発明した養蚕用の乾湿計。金左衛門は、メガルカヤ(イネ科)の穂の先が湿気により、よじれるという性質に着目し、蚕室の湿度を計る計測器に応用した。

一八七二(明治四)年に発明し、一八七五(明治八)年には県の許可を得て販売した。

# 乾湿計用方

養蚕乾湿計用方

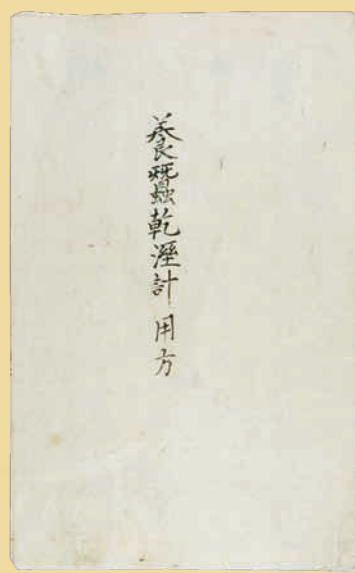
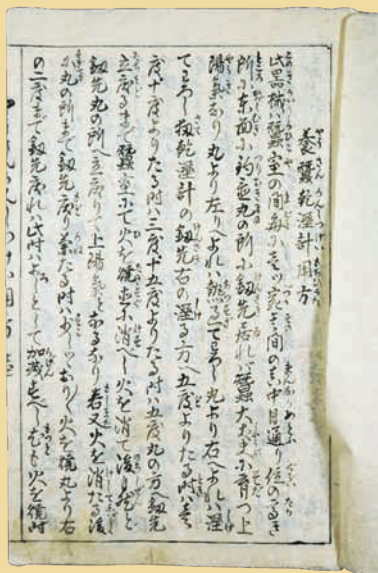
乾湿計は、その使用法を記した説明書を付して販売された。

(一八七五(明治八)年、清水久之助氏蔵)



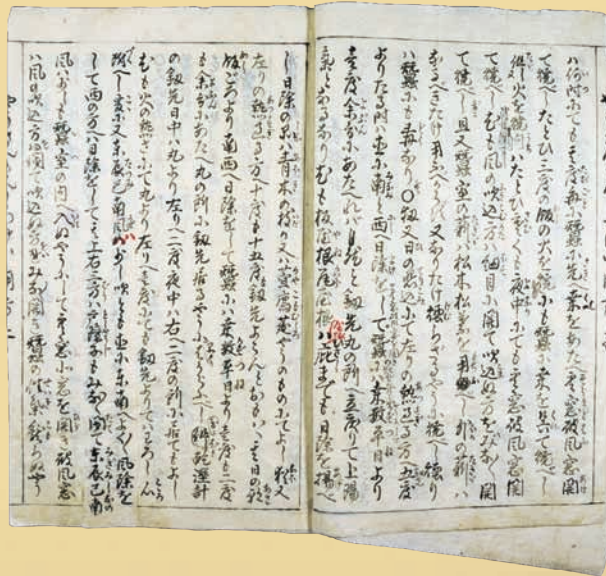
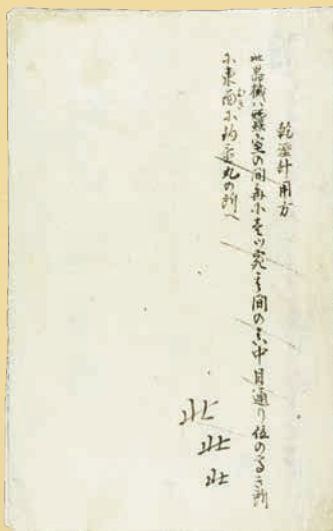
本文 1

表紙



最終頁

本文 2





# 蚕種製造 蚕かひの学、種紙年代鑑

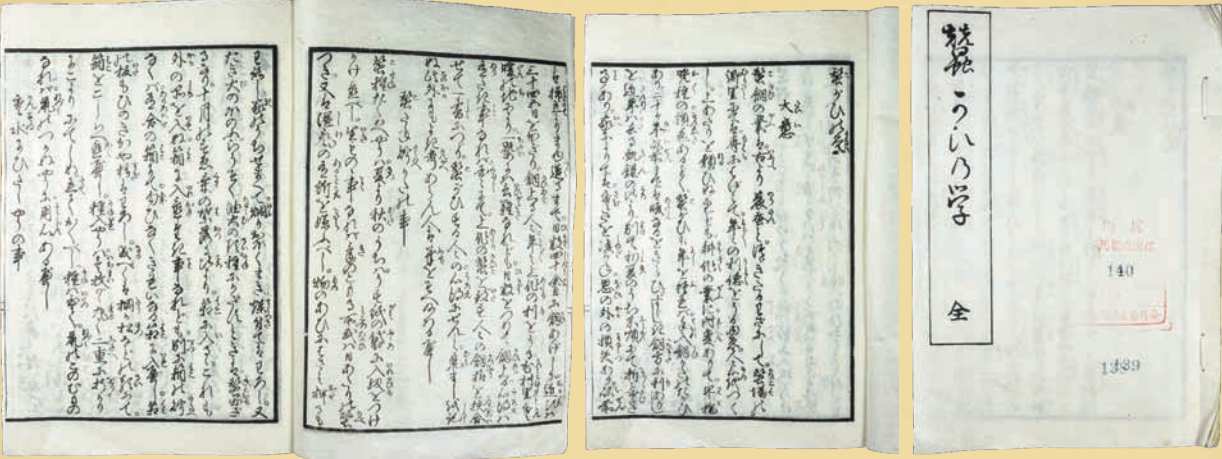
本文2

本文1

表紙

## 蚕かひの学

蚕かひの学  
(一八四一) (天保十二) 年、上田市立博物館蔵



上塩尻村の藤本(佐藤)善右衛門(保右)が著した養蚕技術書。天保の大飢饉(一八三三〜三五)を招いた異常低温は、養蚕にも多大な影響を与えた。本書は、そうした経験を踏まえ、従来の蚕の飼育方法に工夫を加えたもの。

### 蚕かひの学

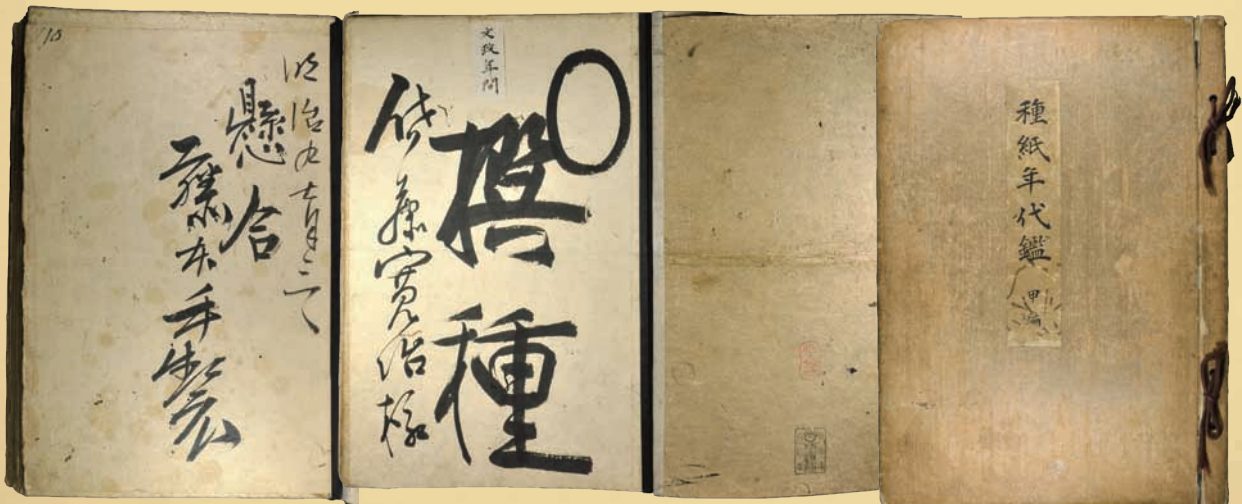
大意

蚕飼の業は古より農蚕とつづきたるわざにして、蚕場の郷里にては、専らにばげみて、年々の利徳とるるゆゑ、人々心をつくし、上あたりを願ひぬれども、耕作の業に、時変ありて、早稲晩種の損益あるごとく、蚕かひも年を経れば、手入飼かたのたがひあり。二十か年以前までは暖なるをまらひ、すずしき飼方に利ありしと、近年ハ、去る飢饉の比より、別て初夏のうら不順にて折々寒き事あり。家によりては、寒さを凌かね、思の外の損失あり。以前は掃立よりまゆ造るまで、日数四十余日に飼あげしに、近頃ハ三十四五日をかぎり、飼上る人々、年々上あたりの利とるる。□村里寒暖の地により、一概にてハ云難なれども、日数をつめて、飼上る心得ハ有たき事なれば、固々にて、上あたりの蚕を致す人々の飼様と検査せて一書につづり、蚕かひする人々の、心得にせんと荒ましと記此外にもよき考あらん人は筆をそへたるべし。

## 種紙年代鑑

蚕紙年代鑑  
(上田市立博物館蔵)

上塩尻村の藤本家・均業社・藤本蚕業合名会社が製造した江戸時代後期から大正初年までの蚕卵紙を綴じたもの。蚕の品種の一つ「懸合」は「信州かなす」ともい、藤本善右衛門繩葛が「又昔」のメスに「黄金生」のオスを交配して育成したものである。「懸合」種は、病虫害に強く飼育のしやすさから全国に広まるるとともに、蚕種製造地としての塩尻の名も全国的に有名となった。





# 新撰養蚕秘書

新撰養蚕秘書

(一七五七(宝暦七)年、上田市立博物館蔵)

上塩尻村(上田市)塚田与右衛門が著した養蚕技術書。十七世紀後半になると、農業技術の進歩により農業が発展した。そうした農業技術の普及は、いわゆる農書(農業技術書)の果たした役割が大きく、この頃から諸産物の農書が刊行された。養蚕については、一七〇二(元禄十五)年、山城国(京都府)野本道玄の『蚕飼養法記』が最も早く、次いで一七二二(正徳二)年、上野国(群馬県)馬場重久の『養蚕育手鑑』が著した。与右衛門の『新撰養蚕秘書』は、それらに次ぐもので、前の二著にはない、挿画が多数掲載されているのが特徴である。また、江戸中期の養蚕技術の到達点といえる内容であり、当時としては異例といえる初版三〇〇〇部も印刷したという。与右衛門は、その後も研究を続け、一七八九(寛政元)年には、『新撰養蚕秘書』の内容に加筆訂正を施した「養蚕後編」を著した。与右衛門の生前に出版に至らなかった「養蚕後編」は、一八九四(明治二七)年、『訂正養蚕秘書』として刊行された。



表紙

本文 1



本文 2



本文 3



本文 4





本文6



本文5



本文8



本文7



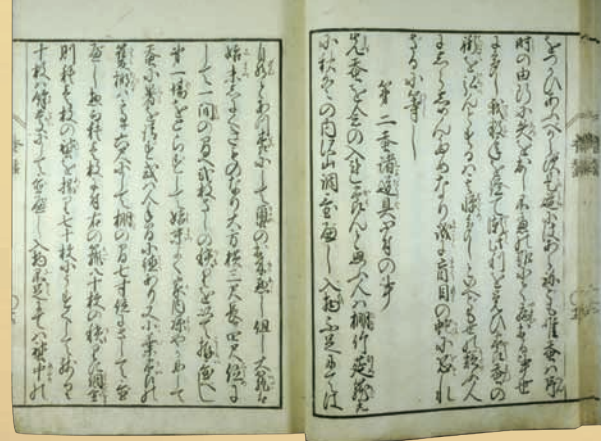
本文10



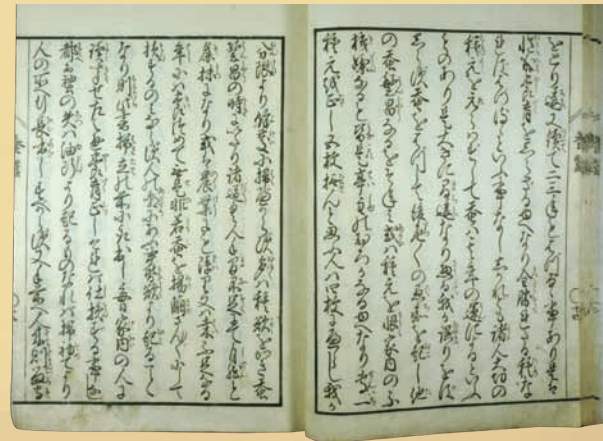
本文9



本文12



本文11





# カズ叩棒

カズ叩棒  
(丸子北小学校蔵)



楮からはぎ取った皮をこの棒で叩いて柔らかくしていく。

# 楮

楮  
(丸子北小学校蔵)



この木の皮が蚕卵台紙の原料となる。

# 漂白した原料

漂白した原料



柔らかくなつた原料(楮の皮)は、煮た後、亜鉛酸ソーダや酢酸などの薬品に浸け熱すると漂白される。

# 蚕卵台紙の紙漉枠

蚕卵台紙の紙漉枠(丸子北小学校蔵)



蚕卵台紙を漉き取る枠板。

# 断切り包丁

断切り包丁  
(丸子北小学校蔵)



漉きあがった蚕卵台紙の大きさを揃えるために使われた包丁。

# 蚕卵原紙

蚕卵原紙  
(阿部勇氏蔵)



明治後半に長瀬で漉かれた和紙(蚕卵原紙)。長瀬産の蚕卵原紙は全国でもトップの生産量を誇り、「長野県小県長瀬村蚕卵原紙改台資会社」は蚕卵原紙製造の最盛期に活躍した組織。



本文 1



一八八八（明治二一）年九月、それまで個々に生糸を製造・販売していた丸子町（現上田市）の製糸家が、原料である繭の仕入の引き下げや、糸質の均質化を図るために製糸結社「依田社」を設立した。一八九〇（明治二三）年、四工場（百十四釜）で操業が開始され、一九一三（大正二）年には、三十一工場（二千八百八釜）が参加する一大結社に成長し、生糸出荷量も全国四位となり、「糸の町・丸子」へと発展を遂げた。その後、一九二九（昭和四）年に始まる世界恐慌、一九四一（昭和十六）年に始まる太平洋戦争により製糸工場は次々と閉鎖され、一九四五（昭和二〇）年、独自に操業していた金夕製糸工場を最後に全ての工場が閉鎖された。

## 依田社

依田社  
（丸子郷土博物館蔵）

本文 2



本文 3



本文 4



## 依田社 関連写真

関連写真（丸子郷土博物館蔵）



## 依田社全景（絵画）

依田社全景 丸山晩霞作

明治 30 年代後半の依田社。五階建ての繭倉庫が際立つ。依田社のあった場所は、現在丸子文化会館セレスホールとなっている。



# 下村氏渡清日記

下村氏渡清日記（下村恵一氏蔵）

一九一一年（明治四十四）年、亀三郎が小諸の製糸場「純水館」の小山久左衛門と清国の蚕糸状況を視察したときの記録。まず杭州に降り立った亀三郎は、イタリヤ人が経営する工場を視察し、工男・工女の一日の仕事量や給料、使用する繭や製造された生糸の質などをチェックしていく。杭州のほか、蘇州の工場なども視察している。また、旅の途中、三才山峠や木曾谷に似た風景を見出し、故郷を懐かしむ。

表紙



# 下村亀三郎（写真）

実利を重んじる慶応義塾に学んだ亀三郎は、丸子に帰郷すると同時にわかには発展を遂げつつあった器械製糸業を起こした。



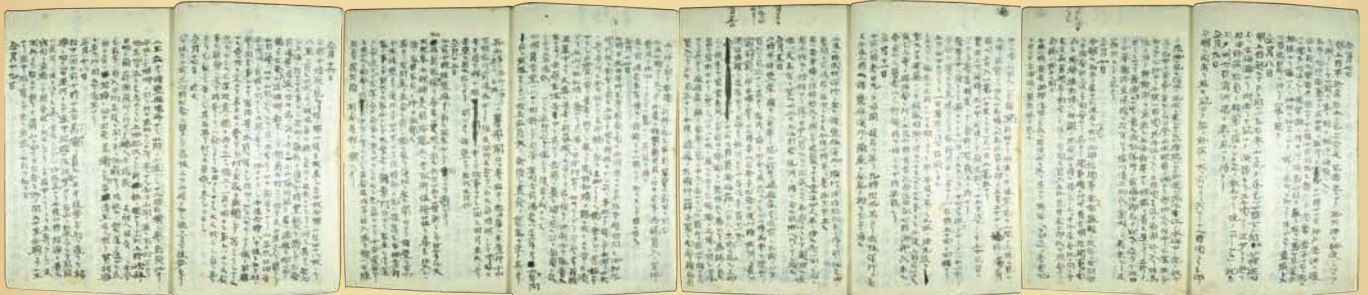
下村亀三郎写真

本文4

本文3

本文2

本文1



# 下村氏米国視察日記

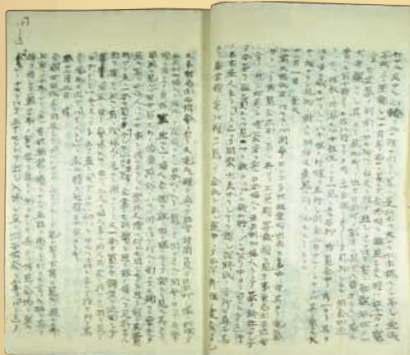
下村氏米国視察日記  
（下村恵一氏蔵）

一九〇四年（明治三十七）年、亀三郎が長野県の委託を受け、アメリカの経済・産業の視察したときの記録。この年、アメリカ、セントルイスでは万国博覧会が開催され、世界四四力国約二〇〇万人が参加し、自国の文化、芸術、産業技術などが展示された。亀三郎の渡米は、まさにその万博を視察することが目的の一つであった。

表紙



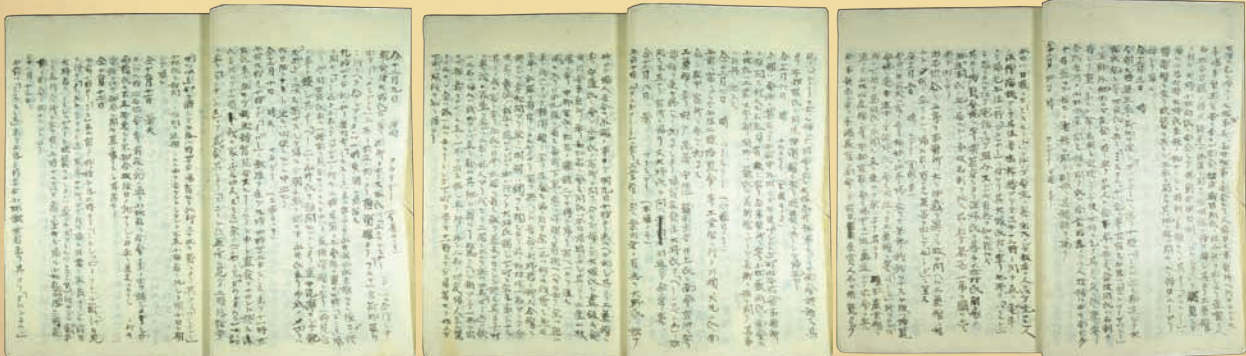
本文1



本文4

本文3

本文2



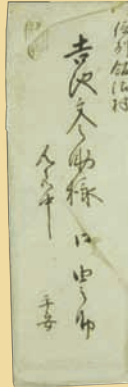


# 吉池文之助宛吉池由之助書簡

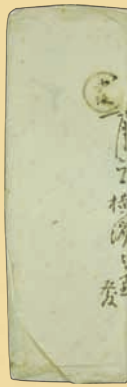
吉池文之助宛吉池由之助書簡（飯沼区蔵）

横浜から丸子飯沼の吉池文之助に宛てた飛脚便。飯沼の郷蔵には、こうした書簡が一〇〇〇通以上も保管されており、調査研究が行なわれている。

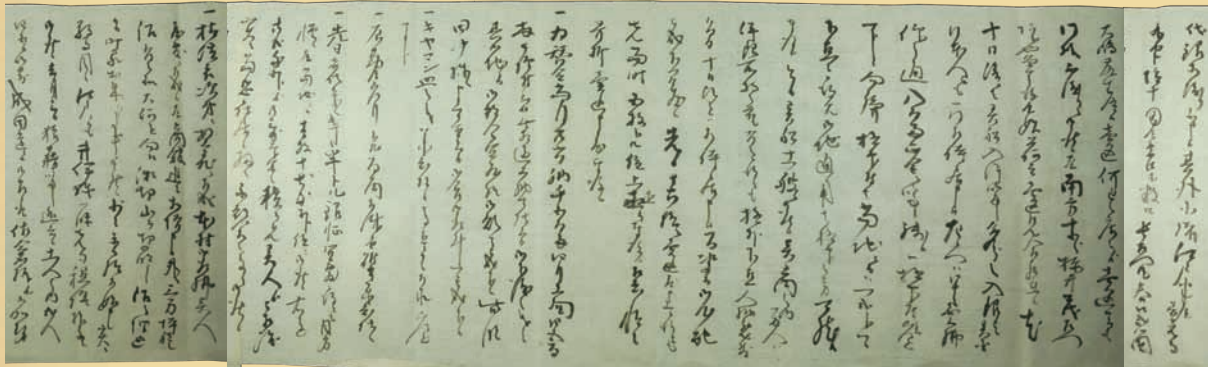
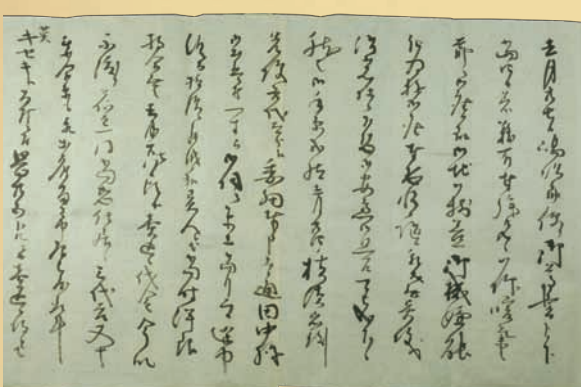
書簡表



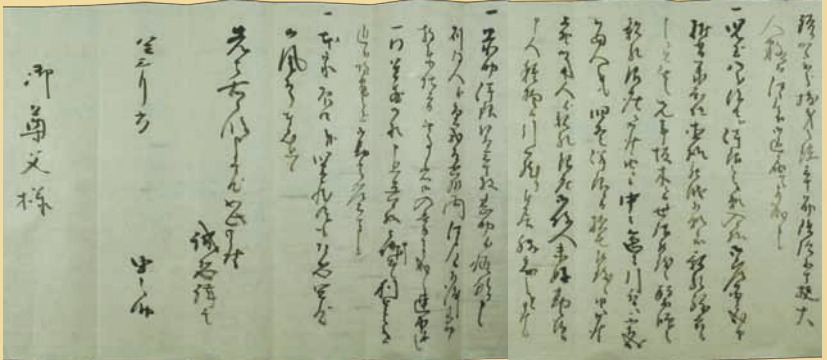
書簡裏



本文



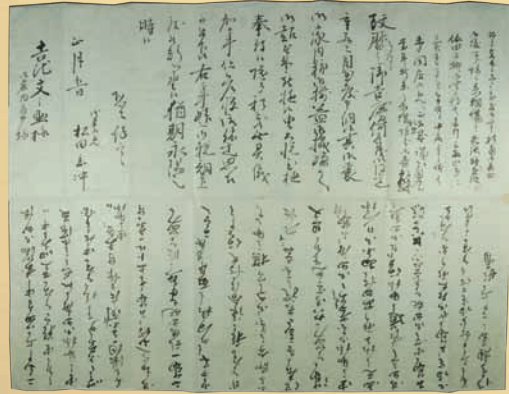
## 郷蔵写真



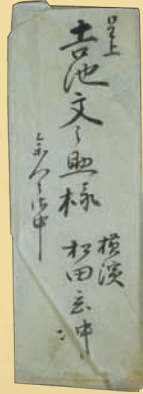
# 吉池文之助宛 松田玄冲書簡

吉池文之助宛松田玄冲書簡（飯沼区蔵）

飯沼村（丸子町飯沼）の医師であり横浜商家中居屋の大番頭でもあった松田玄冲が、同じく飯沼村（丸子町飯沼）の名主で商人であった吉池文之助へ宛てた年賀のたより。この書簡からこれまで謎であった幕末の豪商中居屋の閉店することとなった理由が明らかになった。「張銅一条二付閉店」（五行目）とある。つまり、徳川公儀は、贅を尽くした「銅張りの屋根」をかまえる中居屋をけしからんとして、閉店させたのである。また、その背景には、生糸売込商として諸外国との貿易を一手に引き受け急激に発展を遂げた中居屋のような新興の勢力と、一部の公儀役人・江戸の商家といった旧来の勢力との争いがあったようである。



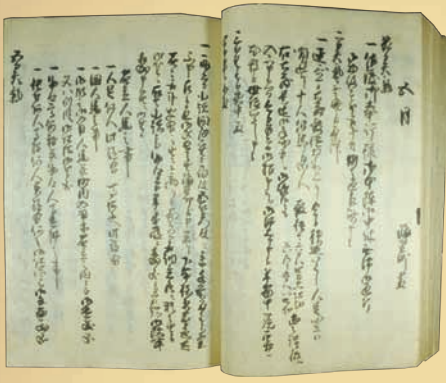
本文



書簡表

# 原町問屋日記

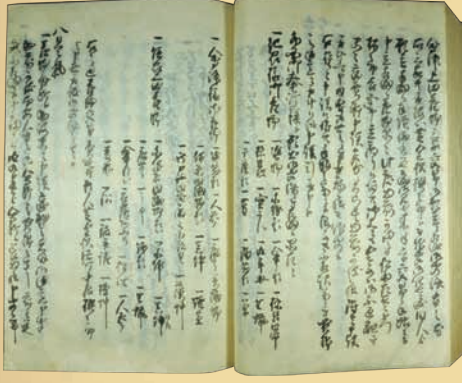
原町問屋日記（一八五九（安政六）年、上田市立博物館蔵）  
 上田藩は徳川公儀より外国貿易の許可を得て、領内の産物の中から生糸、絹織物、真綿、木綿、麻、漆などの輸出を始める。その時、諸外国との窓口となったのが横浜商家中居屋であった。安政六年五月七日の記述は、産物を取り扱うのが中居屋に決まったと領内の商人に知らせている。なお、中居屋はほかに紀州藩と会津藩の産物も取り扱うことになった。



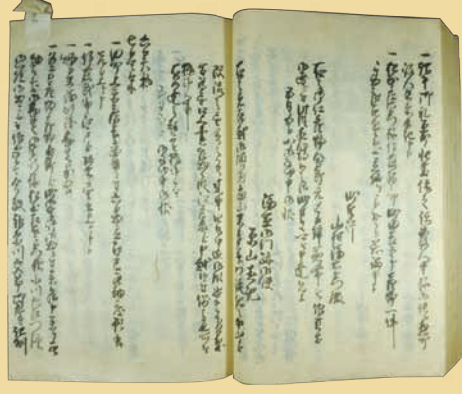
本文1



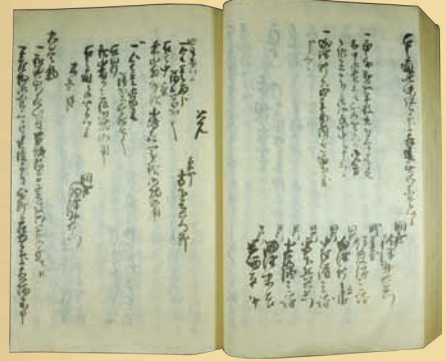
表紙



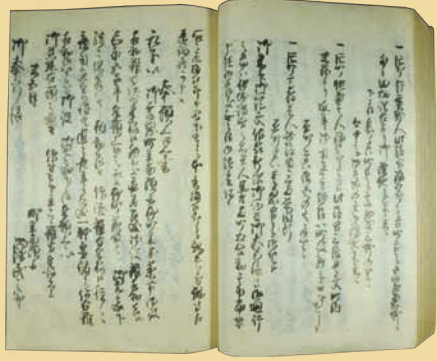
本文3



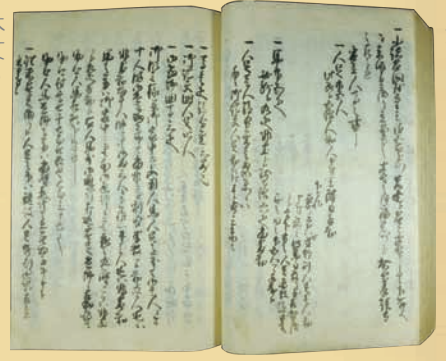
本文2



本文6



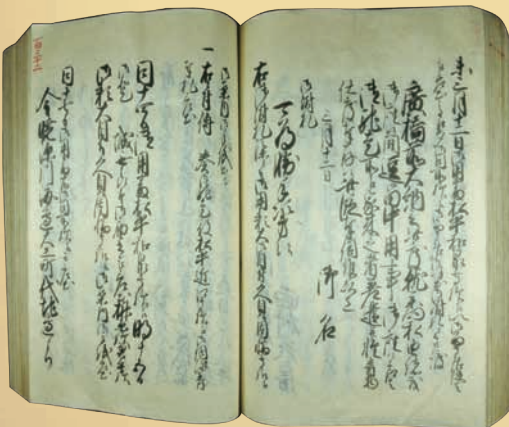
本文5



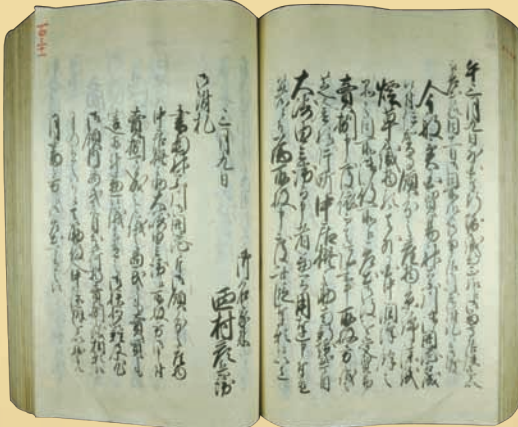
本文4

## 目 乗

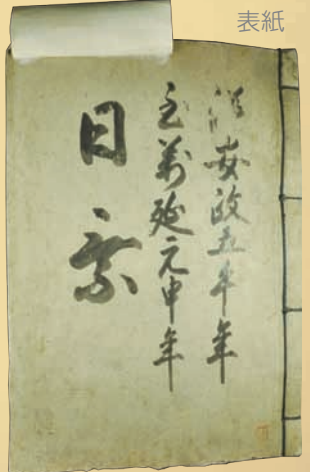
日乗（一八五九（安政六）年、栗山家文書 上田市立博物館蔵）  
 安政六年三月九日の上田藩の記録。上田藩主松平忠優（忠固）が、横浜商家中居撰之助（中居屋重兵衛）らを通じて外国との貿易を行ないたいと徳川公儀に許可を求めている。三ヵ月後の六月二日に横浜が開港する。開国派であった忠優は、公儀中枢である老中という地位を生かし、いち早く外国貿易の準備を始めていたことがわかる。



本文2



本文1



表紙

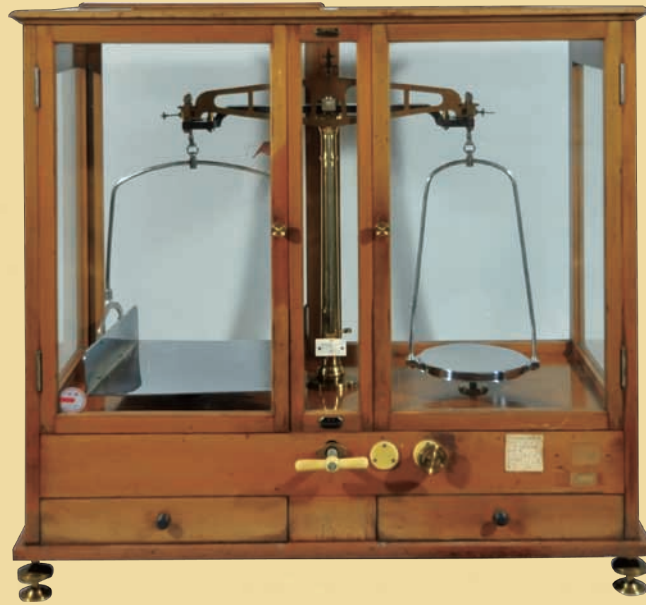


常田館風景  
(絵画)



常田館風景 (笠原工業株式会社蔵)  
大正初期の常田館の様子を描いた風景画。

生糸計量天秤



生糸計量天秤 (笠原工業株式会社蔵)  
蚕糸検査場で使われた天秤。

法被



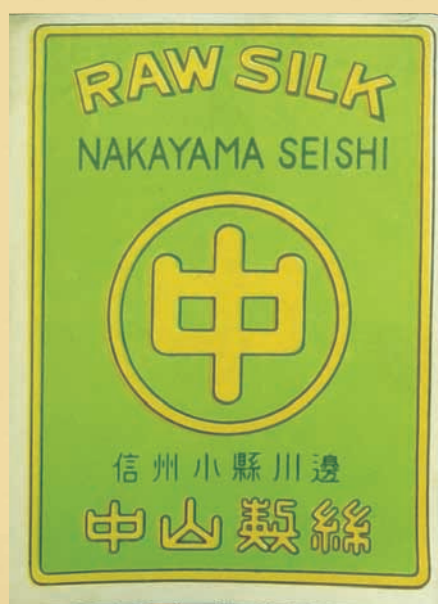
笠原組 法被  
(笠原工業株式会社蔵)  
「笠原組」時代に使用された法被。社名としての「笠原組」は、一九三二(昭和七)年から一九四八(昭和二三)年までの十六年間使われていた。「〇二」は屋号。



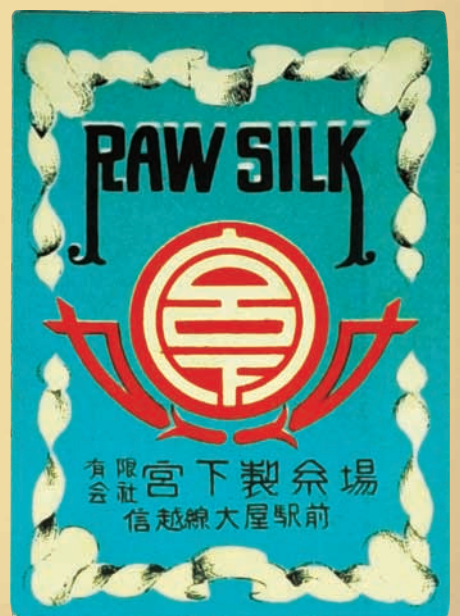
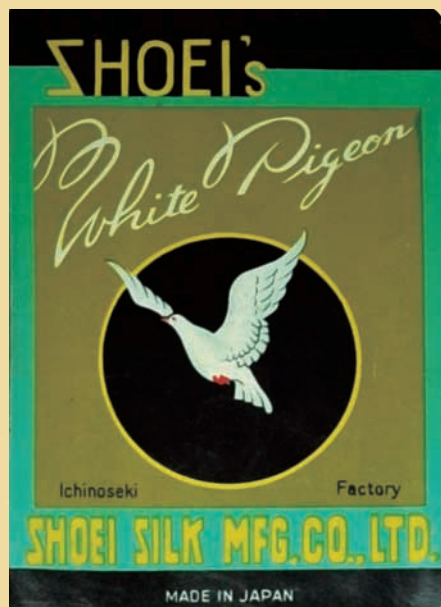
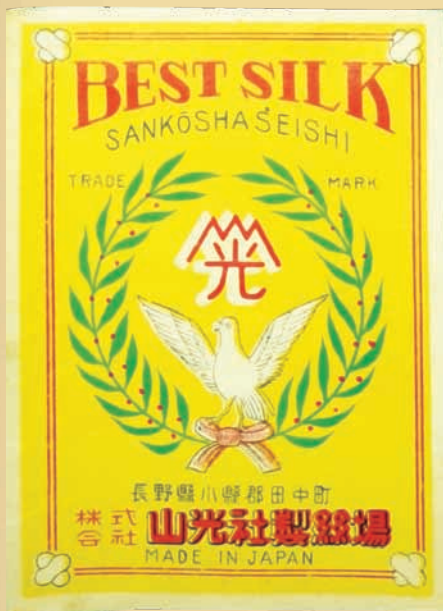
# 商標

生糸商標 (塩尻小学校蔵)

一八五九(安政五)年の横浜開港以来、輸出の中心品目は生糸であった。生糸には、製造者を明記した商標が付された。常田館のほか上田小県地方の製糸会社などの生糸商標である。









# 大日本蚕業歴史画

大日本蚕業歴史画 高島諒多編集・発行（上田市立博物館蔵）

明治政府の養蚕政策を担当した佐々木長淳が明治後期に監修した掛軸。この掛軸のなかで、上田小県地方の蚕糸業に関連した記述が最も多く、その数は11箇所もあり、日本の蚕糸業の歴史においてこの地方が果たした役割の大きさがわかる。



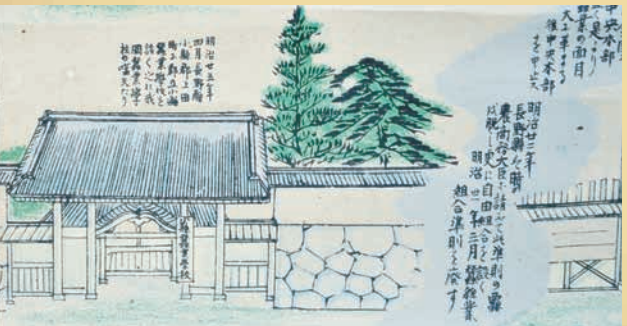
・享保年中  
上田綿  
国史曰、  
享保年中、八  
王子及び青  
梅より上田  
綿を出す。上  
田綿は始め  
信濃上田に  
於いて織り  
出す故に此  
の名あり。秩  
父絹・福島絹  
も亦此の時  
代に出つ。



・寛政年中上田提糸  
寛政年中、信州上田地方  
に於て手挽を以て主糸を製  
す。之れ上田提糸の始めな  
り。



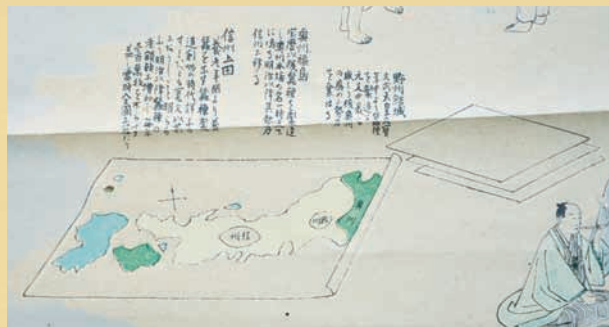
・享和年中  
長瀬村  
享和年  
中 信州小  
県郡長瀬  
村に於て、  
蚕種の原  
紙を漉き  
糊む。製造  
の数当時  
全国第一  
と称す。紙  
質亦甚だ  
佳良。



・蚕業学校設立  
明治二十五年四月長野県  
小県郡上田町に郡立小県蚕  
業学校を設く。之れ我國蚕  
業学校の嚆矢たり。



・養蚕雑誌



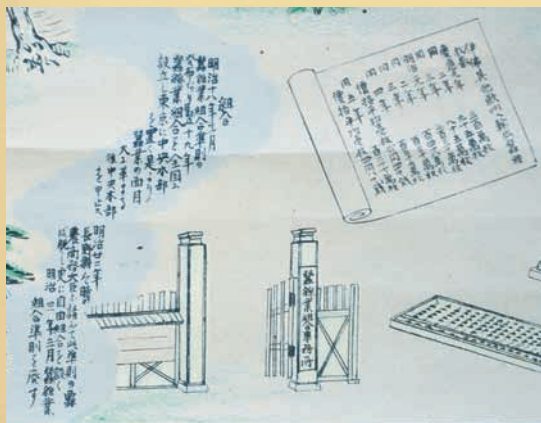
・信州上田  
養老年間より養蚕をなす。蚕種製造創始の時代詳ならずといへども寛文以前になりしこと明らかなり。明治以降蚕種の産額にわかに増加し、毎年言百万枚を下らず。蓋し当時全国に冠たり。



・天保上田領制度書要領、文政のほせ糸  
天保年間信州上田藩しばしば令を發して蚕種商人を戒む。文政十二年手挽提糸の名称を付し等級を分ち、大櫻、中櫻、小櫻の三等とし、専ら西京西陣へ上ほす。信州上田地方に於て俗に之を「のほせ」と云ふ。蓋し西京に上ほせたるに出づ。



・伊勢山「小石丸」「又昔」  
安永年間、繭の大巢（大如来）流行せしが、異種年を逐ふを以て小巢（小如来）再び勢力を得るに至れり。□□奥州の人伊藤彦次郎なるもの小如来の昔に復へると云ふの意を採り「又昔」と命名す。是又昔の起源なり。  
天保年間、信州小泉郡伊勢山村（今神科村）小田中源五郎なるもの又昔の中より丸形の繭巢を撰出し、試に之を踏み潰さんとするに其質硬く殆んど小石の如くなるを以て之に「小石丸」の名称を附せり。今の小石丸の名是より起る。



・蚕糸業組合



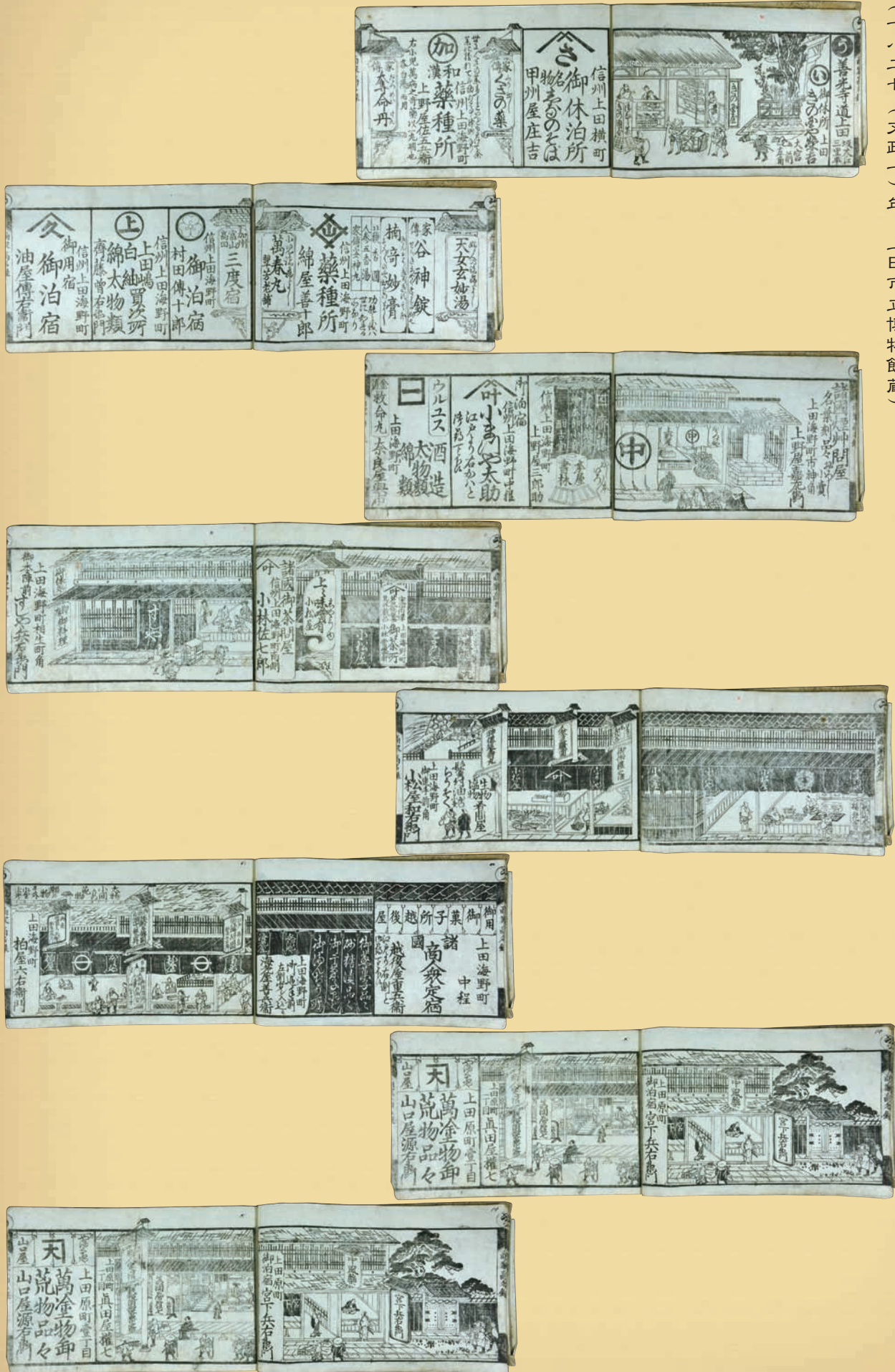
・蚕病研究



諸国道中商人鑑

(一八二七(文政十)年、上田市立博物館蔵)

中山道や北国街道の道筋の商家・旅籠屋を掲載した小冊子。掲載希望者から広告料を徴収し、上田からは四十三が紹介されている。当時の上田の商家や旅籠の様子を伺い知る事が出来る貴重な資料である。



信州上田原町  
萬屋友次郎

太物

信州上田原町

萬屋民之助

金

此所專賣  
諸名物  
當所即法衣所  
名產信濃紋帳  
上田原町  
備本產新在衛

信州上田原町

砂糖類

疊表類

荒物類

櫃木屋安齋

上田原町查目

上田織物所

帶類其外織物

志摩屋八郎兵衛

馬道具類

膳枕類

名物

信州上田原町

上田嶋白細

買次所

布屋市郎兵衛

現金

安賣

上田嶋白細類

白細嶋白類

呉服太物類

越後藥類

京都織物類

上田嶋白細類

上田原町

九屋權八

此所專賣  
諸名物  
當所即法衣所  
名產信濃紋帳  
上田原町  
備本產新在衛

上田原町武丁目

上田嶋

白細買次所

諸國綿類

布屋利兵衛

信州上田原町

加智金全坊

雷方紫金銀

名產信高石硯

上田原町武丁目

上田嶋

白細買次所

布屋吉五郎

賜御本陣御休泊所

軒心丸

和漢種所

砂糖漆沖類

漆物劑物類

和漢諸流筆墨硯

酒造

信州上田原町

鼠屋右衛門

此所專賣  
諸名物  
當所即法衣所  
名產信濃紋帳  
上田原町  
備本產新在衛

上田原町三丁目

呉服太物類

伊豆屋友吉

諸國紙類

紙屋藤兵衛

信州上田原町

林壽三郎

御電測會

林壽三郎

信州上田原町

高御休所

名物

山木金吉

大物品

殿中花玉

御菓子司

信州上田原町

買次所

布屋市郎兵衛

呉服太物類

現金正札附

上田嶋白細類

上田島白細

上田嶋白細類

上田嶋白細類

當所即法衣所  
名產信濃紋帳  
上田原町  
備本產新在衛

萬屋友次郎

上田嶋白細類

當所即法衣所

信州上田原町

萬屋友次郎

成澤

大物品

大物開類

和諸流筆墨硯

德寶丸

信州上田原町

買次所

布屋市郎兵衛

萬屋友次郎



# ペリー来航図

(上田市立博物館蔵)

一八五三(嘉永六)年六月三日、四隻の黒船が浦賀沖に現れた。その後、徳川公儀はアメリカ力使節ペリーの強圧的な態度に押し切られる形で、開国に踏み切ることになる。そうした中、人々は初めて目にする欧米の優れた文物を詳細に記録していく。この図には、ペリー提督一行の様子や浦賀警備の様子のほか、蒸気船の大きさや装備の内容などが細かに記されている。



船員図



蒸気船図



道具類



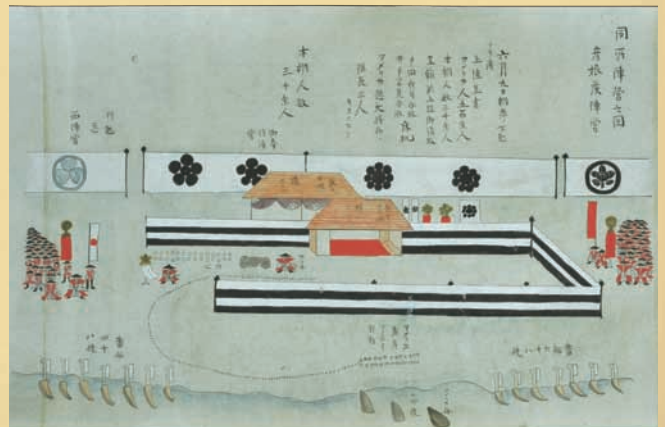
久里浜陣押荒増図



アメリカ人浦賀上陸行軍図



久里浜図



彦根藩陣営図





# 蚕都上田 情報館

SANTO UEDA

本資料集に収録した内容を含む資料をウェブでアクセスできます。

さんとうえだ

検索



<http://www.santo-ueda.jp/>

## 蚕都上田の歴史資料を活用したい方は...

- 展示パネル  
本資料集の内容とほぼ同じ展示パネル（B2版）を貸出することができます。
- 蚕都上田歴史資料集  
本資料集は、ご希望の方に配布いたします。

## ● お問い合わせ ●

### 蚕都上田プロジェクト

市民・団体・大学・行政・企業・学校などが  
連携して「蚕都上田のまちづくり・人づくり」を進める  
参加型プロジェクトです。

【事務局】 〒386-1298 長野県上田市下之郷658-1

長野大学地域連携センター内

【連絡先】 電話&FAX：0268-38-7771

E-mail [commit@po11.ueda.ne.jp](mailto:commit@po11.ueda.ne.jp)

この資料集は、平成21年度 長野県 地域発 元気づくり支援金により作成しました。